

第8編 美しい日本の山と私



写真1 還暦の誕生日（奥秩父）

改まって山行記を書くのは外国の山登りをしたときだけであった。別に日本の山を馬鹿にしているわけではない。むしろそのみずみずしさを感じる日本の山に一番親しみを覚える。まあこれは当然のことである。日本の美しさは四季がはっきりしているところにあるといわれる。山ではこの傾向がさらに倍化される。

春、畑の雪融け後を追うように露の臺が頭を出して、林に入れば片栗の花が奥ゆかしく咲いている。

夏、咲き乱れる高山植物の群落の中に身を沈めることは、そこを知る人だけが得られる至福の情景である。

秋、紅葉の中に存在することを感じられるだけで人としての意味を知ることができる。

冬、白銀の大地と空の青さのコントラストも山でのみ得られる絶景である。

たいていどこかの山へ行くときは、その時々親しい山仲間にもまず声をかける。応えてくれる人が誰もいないときは1人で行く。これが山登りを長く続ける秘訣である。誰もいないから止めたといっていたら続けることはできない。山岳会に入ると、妙な競争意識が出てしまったりするような気がするので入りたくない。最近は雪山に登るときは国内ツアーのご厄介になることもある。やはり安心できる点がいい。もともと冒険心なんてそれほどない。楽しんで楽しめるのが一番であり、そのためには知らない人とのふれあいによるわずらわしさも我慢できる。

還暦の誕生日は奥秩父の金峰山で迎えた。今のところまだ衰えは感じられない。でも衰えは確実にやってくる。ちょうどいい機会だから過去の山暦も振り返っておこう。

1. 南アルプス

初めて南アルプスを見たのは、大学のワンダーフォーゲル（WV）部員であった40年も前の5月の大菩薩峠からだったか。もっと前から見ていたのであろうが、“あれが北岳、あっちが甲斐駒”などといって見たのはこのときが初めてであったと思う。すでに雪解けの終わった鳳凰三山などを前衛に立て、北岳を頂点に南アルプスの山々が対照的にその白きたおやかな峰々をゆったりと横たえた姿に、私はすっかり魅了されてしまった。

次の年、大学3年生になった私は上級生として5月末の鳳凰三山を登っていた。こんな時期にしては珍しく前日に降った大雪のために困難を強いられていた。観音から地藏に向かって下っていたとき、踏ん張った足元の雪が崩れて滑落してしまった。新雪から頭を出している尖がった岩がだんだん近づいてきて、まるでスローモーション映画を見ているような感じであった。普段は手には何も持たない主義であったが、このときはたまたま拾った太い木の棒を持っていた。じたばたしたらそれが雪に突き刺さり、ピッケルの役目をしてきて止まることができた。見上げるとちょうど目の前に北岳があった。切立ったバットレス（胸壁）が雪の定着を拒否して黒く光っている。人を寄せ付けないその姿に圧倒されたが、“俺をこんな目にあわせた南アルプスは、絶対に全山登りつくしてやる”そのときそう誓った。“ちゃらちゃらした北アルプスは嫌いだけど、重厚な南アルプスは俺の好みだ。”と若いころはそんなことをよく言ったものである。

鳳凰で滑落したその年に、北岳・間ノ岳などの白根三山と甲斐駒・仙丈に登り、次の年の‘67年には学生生活の最後を記念して南アルプス南部をやっつけ、南アルプスの大半を登りつくすことを図っていた。自分がリーダーとなって後輩を引き連れて、山伏峠から光岳まで縦走を狙ったのであるが、この年はツキがなかった。8月お盆前後という時期を選んだことも間違いだったが、これは結果論である。台風にやられて、赤石岳頂上の避難小屋に3日間閉じ込められた挙句、風邪を引く者が二人出て小渋川からの下山を余儀なくされた。この時代はサラリーマンに夏休みを取るなどという習慣はなかったので、もう俺には南アルプスの全山制覇はできないとあきらめた。それから3年後の‘70年には世間でもサラリーマンが夏休みを取るという話が徐々に聞かれるようになっていた。思い切って休暇届を出してみた。ただしそれ程気楽だったわけではない。休暇届と辞表と両方持って行ってどっちか受け取ってくださいと、半ば強制的な奪取であった。WV部OBとして後輩の学生たちと登った。この年も台風にやられて同じ赤石岳の頂上でまたまた1日の停滞を余儀なくされた。3年前の私は台風で閉じ込められたくらいですっかり縮こまってしまってなんとも情けないリーダーであったが、このときの後輩リーダーの千野君は、停滞日でもニコニコとトランプに興じていてまったく動じるところがなかった。自分が人の上に立つ人間でないことがこのとき判った。おかげで南アルプスのピークは一通り登り尽くすことができた。話はそれるがそれから2年して、同じような感覚で会社に辞表を出したら、今度はあっさり受け取られてしまった。

以来、南アルプスには何回も登っている。夜叉神峠～甲斐駒・仙丈～北岳～塩見岳～荒川岳～



写真2 観音岳（このあと滑落）



写真3 富士山と北岳（仙丈ヶ岳から）

赤石岳～光岳とメインの稜線もすべて歩きつくしている。奥深い南部の山でもだいたい3回以上登っている。テント泊で登るのが当たり前であったということが、山小屋泊が当たり前になったという違いはあるが、歩くスピードなどにまだ衰えはない。

雪山は自分には高嶺の花であるが、5月とはいえ雪に被われた仙丈や甲斐駒にも登ったことがある。数少ないピッケル・アイゼンワークの経験の一つである。この経験があったから、'03年11月にヒマラヤのヤラピークへの登頂もできた。南アルプスは私の山歴の中心部である。

1) 鳳凰三山

67/05 72/05 72/11 00/07 03/09

南アルプスへの入口の山が鳳凰三山である。私の場合も南アルプスへの最初の挑戦は、前述の'67年5月である。'72年5月に上原・今村と鳳凰～早川尾根～甲斐駒～仙丈をやったときは、私の山生活における最も充実した時期の始まりであった。彼らはWV部における私の後輩であったが体力も優れていたり、山に対する熱意も一級品であった。彼らからは教わるが多かったが、その割には私が先輩ということで一番威張っていた。私に、下手に荷物を持たせるとへばってしまうからと、いつも彼らがたくさん背負った。料理やテント張りには彼らのこだわりがあるので、私は手を出せなかった。つまり何にもしないでただ歩けばよかったのである。'72年11月には観音岳で初めてブロッケン現象を見て感激したものである。それ以来だいぶ間が空いたが、最近では'00年のときに中年のおばさんが、“この人の歩き方はすごくいいから後ろから歩かせてください。”と言われて、ぴったり後ろを付かれて歩いた。もともと歩き方は悪い方なので、そんな評価を受けてけっこう自信になったし悪い気はしなかった。今でも登りの歩き方は良い方みたいである。



写真4 '72年11月の鳳凰

しかし下りは年々悪くなっている。'00年以降ではこの山へ登る目的は、海外へ行く時に耐えられるだけの体力を維持するということになってしまっている。少しすまない気もする。また歩くコースにしても夜叉神から入って御座石へ抜けるというバカの一つ覚えである。

2) 甲斐駒・仙丈

67/09 72/05 76/08 77/05 79/05 92/05 04/08 04/10

'04年8月にバカ尾根といわれるほど長すぎる仙塩尾根北部に、還暦の自分の体力を測るために登ってみたが、天気も良かったので何とか上がった。仙塩尾根は'76年にテントを使って仙丈から塩見まで全部やったときにも結構やりがいのあるところだったが、今回は新宿を早朝に出発してその日のうちに北沢峠経由で仙丈小屋へ入り、二日目には仙塩尾根を南下して三峰岳～間ノ岳～濃鳥小屋までやった。一番きつい二日目は3時に起きて4時から歩き始めていた。けっこう気合が入っていた。長大な仙塩尾根を満喫するというよりは、ちゃんと着けるだろうかという心配の



写真5 仙丈ヶ岳の夜明け

方が大きかったが、これだけやれたということはまあちょっとしたもんだらう。この年には 10 月にも甲斐駒に登っている。翌月のヒマラヤ行きのために、耐寒訓練のつもりで北沢峠にテントを張った。甲斐駒に登った後その日のうちに帰らなかったため、4 時にはヘッドランプを頼りに歩き始めていた。歩き始めて 30 分ぐらいした時にヘッドランプが極端に暗くなってしまった。電池を代えて歩き始めたが、しばらくすると今度は完全に消えてしまった。前の電池に戻すとまたうすぼんやりと点くので、タマ切れではない。行くのも戻るのも危ない。かといって停まっていれば寒い。窮余の一策で携帯電話の明かりで歩き始めた。30 分ぐらいはがんばったが続く訳がない。後ろに懐中電灯の灯りが見え隠れしていたので、その人達を待って何とかした。故障の状況からスイッチが粗悪品であったのだと思って、下山後購入した登山用品店へヘッドランプと新旧の電池を持って行って製造元の手家電メーカーへの調査依頼をしたが、調査依頼の結果は“新しい電池を入れたら問題ありませんでした”というものであった。真っ暗闇の中を携帯電話の灯りで歩いた俺の気持ちを理解しろというほうが無理なのであろうか。もちろんその登山用品店とそのメーカーは私のリストからは消えた。

5 月の連休には、甲斐駒や仙丈は比較的傾斜がゆるいので雪があってもまあ何とか登れるだろうとよく登った。もともと雪山は正式に訓練したわけではないので、ピッケルは飾りに過ぎない。そんな自分でも雪の 3 000m のアルプスへ登ってしまうのだから危なっかしい。

3) 白根三山

66/08 69/08 96/08 01/08 04/08

白根三山の親分格である北岳には 4 回登っている。お池小屋・池山吊尾根・大樺沢の各コースから登ったが、両又小屋からのコースはまだやっていないのでいつかはやりたいたいと思っている。‘69 年に登った池山吊尾根はそう気軽にできるコースではない。夜叉神峠を越えてバスを降りるといきなり 40 分間野呂川へ下る。同じレベルまで登り返すのに 2 時間ぐらいかかる。途中池山小屋のテントサイトで泊まり、翌日北岳へ登る。実に広大な尾根である。頂上だけのつまみ食いという根性では出来るところではないが、WV 部後輩の学生と一緒にあったからできた。

‘96 年に当時部下であった寺沢君と登った時には時間の余裕があったので、北岳山頂で 1 時間程の昼寝としゃれ込んだ。そのとき人見知りしないオコジョが出てきて、すぐ目の前で前足を浮かせて後ろ足だけで立つような愛嬌のあるしぐさで楽しませてくれた。こんな時が一番幸せな時である。あの時はさらに濃鳥経由で奈良田へ下り、その少し南にある西山温泉に泊まった。超ぬるま湯温泉であり、体温より少し温かい程度である。1 時間以上もの長い間浸かっていると胃腸に効くらしい。そのようにしている人が何人もいた。寺沢君と酒を飲んじゃ風呂へ行った。朝にもしつこく風呂に行き、寺沢君に“昨日から 3 回も入っちゃったよ”と言ったら、彼から“6 回目です”と言われた。この頃まではまだテントでやるだけの元気があった。

北岳は交通の便が良いので、これから何回も登るような気がする。富士山に次いで日本で 2 番目に高い山であるので、人気が高く夏は混んでいるが、遠望しても登って近くで見た時でも、その風格のある山容が大好きである。もう少し人が少なくなってくるとありがたいが、人間とは贅沢な生きものである。



写真 6 北岳

4) 塩見岳

69/08 74/08 76/08 78/08 97/08 01/08

南アルプスは南北に稜線を伸ばしている。その中であって塩見岳だけは東西に稜線を張っている、写真6に見るように間ノ岳方面から見るとこんもりして女性の乳房を思わせる山容をしている。しかし登ってみると南北方向は削げているのでけっこうごつごつした山である。遠望した時ののどかな姿はいかにも南アルプスらしい感じで、私の好きな山である。塩見岳のとなりに位置しているが、よほど好きな人でなければ行かない蝙蝠岳へも‘76・‘78年と2回登っている。塩見岳から蝙蝠岳の間はほとんど木のない稜線であり、強烈な夏の日差しに腕を焼かれ、下りてから薬屋に行って日焼け止めを求めたら、“お客さん、それはヤケドです”と言われたことがあった。私の二の腕にあるたくさんのシミはこのときにつけられたものである。‘76年のときはWV部後輩の飯塚に引っ張られて、仙塩尾根を全部やった後に雪投沢を池の沢へ降りた。さらに二軒小屋を経由して転付峠越えをやり、奈良田温泉に泊まった。今は池の沢のコースは無くなったようである。温泉へ向かう途中でタクシーにマスの養魚場に寄ってもらって、刺身用と焼き魚用を買って行って旅館で造ってもらった。下りてからたらふく酒を飲もうと思っていたが、山行がけっこうハードワークだったので、ビール2~3杯でみんなひっくり返って寝てしまった。温泉のことは記憶にないがマスがうまかったことは覚えている。山から下りると必ず温泉に入って帰る人も多いが、私の場合は一人の山が多いので、そんなときは真直ぐ帰る。だから温泉の思い出は誰かと一緒だったときに限られ、しかもお酒が付いてまわる。さっぱりしないで帰ったからといっても、汗臭く感じるのは他の人のことであり、自分にとってはこの臭いも古い付き合いなので別に気にならない。

飯塚は山での下り方がうまい。長身の背を真直ぐ延ばし、腰を落として歩く。きわめてバランスが良く、見かけより速い。私の歩き方はアバウトで、下りは何とかなるという心がけで適当に歩くから、すぐ尻もちをつく。尻もちぐらいは転んだうちに入れていないからいつまでも直らない。それでも飯塚の後ろを歩いているときは、少しはまねをしてきれいな歩き方になった。でも登りは真面目にやらないとバテルから上原の教えに従って改善したが、下りは心がけが悪かったので飯塚の監視下から離れるとすぐに元に戻ってしまった。いまそのツケが来ている。どう反省しても下りの歩き方は年々悪くなっていく。昔は若さの持っているバネで何とかなっていたが、今は腰が引けてヨチヨチ歩きたいでみっともない限りである。

熊野平～塩見岳～山伏峠の仙塩尾根南部は、‘76年に飯塚たちとテントでやっていたときにはすごく長く感じられて途中の北荒川小屋で一泊したが、‘01年にWV部時代の同期の佐々木と登ったときには熊野平～山伏峠間を1日行程でやった。他の多くの人たちも当たり前のようにそう

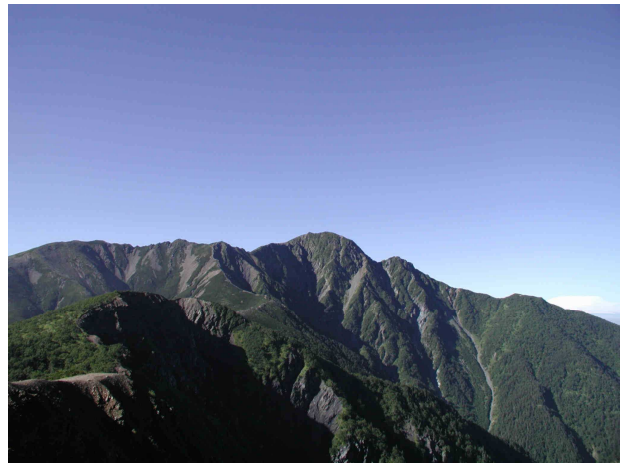


写真7 塩見岳



写真8 花フキの群落

していた。熊野平などの小屋が整備されたことも一つの要因かもしれない。

5) 荒川岳・赤石岳・聖岳・光岳

67/08 70/08 92/08 93/08 99/08

南部の山々は特に手ごたえがある。以前は細切れに登ってもアプローチが長いので日数はあまり縮まらなかった。バスの終点の畑薙第2ダムから樫島までの6時間に及ぶ自動車道歩きも何回かやったが本当に嫌になる。勢い山伏峠から光岳までのいっきに縦走というスケジュールを立てることになり、7日間位必要になる。最近では東海フォレストが樫島や二軒小屋までバスの送迎してくれるので、細切れ登山も可能になった。山伏峠～光岳まで通してやったのは‘70年8月だけである。高山裏～荒川岳は2時間続くお花畑の中の登りであり、ここをやるときには覚悟がいる。‘90年代にはこの地域を少なくとも3回は登っているが、部分的にしかやっていない。‘99年のときは千枚小屋から山伏峠までを1日でやってしまった。当時55歳であるからまだまだ強かったけど、コースタイムで12時間半、もうあんな無理をするのは止めよう。

南アルプスが北アルプスに比べると人気がないという要因の一つとして、やはり森林主体の南アルプスが岩峰主体の北アルプスより魅力的に劣るということがいえるであろう。訪れる人の数が正直にそれを表している。けれども私のように熱烈なファンが多いのも南アルプスである。森林とお花畑の調和に美しさを見出すようになれば、山男として一人前である。だから南アルプスファンは山屋としての息の長い人が多い。南をやるときのコツは、余計なことを考えずにただひたすら歩くことである。そしてぱっと顔を上げたときにお花畑が一面に広がっていたりして、そんなところが南アルプスである。



写真9 荒川岳お花畑の中の登り

いつの間にか夏山歩きではTシャツに短パンという姿になってしまった。学生時代には、山では夏でも長袖のシャツではなければいけないと言われていた。ましてや短パンなんてとんでもない。岩角などですりむく可能性が高いし、もっと大きなケガにも結びつきかねない。しかしそれでも楽なほうが良いよということである。こんないい加減な考えなのでバチが当たったことがある。‘92年8月の赤石岳の稜線上でこの格好で歩いていたら、稜線に吹く冷たい風に冷やされたのが悪かったらしい。樫島への下りで、赤石小屋を過ぎてから足が痙攣を起こして、偉い苦勞をした。同行した会社の先輩の安藤さんにも迷惑かけた。

私の足は太くて短い。だから人様の前へ見せびらかすようなシロモノではない。しかし山登りをする人たちは普通の人たちとは違う見方をするらしい。短いけど鍛えているから足首はしまっていて、ふくらはぎや太腿の太さとのコントラストがけっこう良いらしい。歩いているときに後ろから、“あの足は鍛えているね”なんて声が聞こえることがある。まあ悪い気はしない。最近ワンタッチでアイゼンをつけられる登山靴を新調したら、靴の高さが高くて足首の上まで隠れてしまう。夏用としてトレッキングシューズをもう一つ買わねばならない。

2. 北アルプス

ちゃらちゃらした北アルプスは嫌いだと言った割には良く登っている。やはり日本を代表する山塊であり、岩稜を中心にした広大な山容は日本では隋一のものである。

大学1年生の秋だった。前期の試験が終わってすぐに秋合宿になった。上高地の横尾をベースキャンプにして、奥穂・槍・常念などをピストンする計画であった。この年の北アルプスは10月であるのにすでに数回の積雪に見舞われ、われわれが横尾にテントを張ったときにも穂高など山頂部は吹雪になり、遭難死体が降ろされてくるのに出会ったりした。1年生の私にはショックなことであった。行程は大幅に縮められて合宿は遂行されたが、体力のなかった私はそれでも毎日バテていた。最終日、横尾からの下りの予定は、徳本峠を越えて新島々までの11時間行程であった。この



写真10 涸沢での19歳の私

日は朝から雨であり、降り続くようであったら3時間で行ける上高地に変更と言われていた。徳本峠への分岐点に来たとき、雨は弱まっており計画通りの行程が採られた。ヤダナーという気持ち強く落ち込んだ気分のまま、斜面を巻くようにつけられた道を登り続けた。目の前が真っ暗になって意識も薄らいでいった。道は曲がっているのに真直ぐ歩いていってしまったので、気がついたときには斜面を滑り落ちていた。幸いに腹ばい状であったので、熊笹をつかんで止まることができた。私の前を歩いていたリーダーが飛び込むような形で滑り降りてきてくれた。道へ這い上がるまでは私のザックを持ってくれた。“大丈夫か？”と言われたが、“だめです”という答えはないので、その後はザックを担いで最後まで歩き続けた。達成感などというものはなく、ただ歩き着いただけである。このとき北アルプスなんて2度と来るものかと思った。もし自分が山で死ぬとしたら、季節は秋だろうとも思った。秋の山では、都会にいと身体や意識は夏の延長線上にあり、それがいきなり冬の世界へ入ってしまうので、1年中で一番寒さを感じる。これが‘64年の私が19歳の時のときのことであり、私がその次に北アルプスに登ったのは‘73年の針の木岳まで待たなければならない。

そんなこともあったが、後述の日本百名山のこともあって今では北アルプスもほとんど登りつくしている。それに北アルプスの山岳美は日本では秀逸なものであり、この山塊を抜きにして日本の山を語ることはできない。‘74年には三俣蓮華・野口五郎・水晶と薬師。‘75年には五竜と黒部五郎・槍・笠。‘77年は白馬・唐松・鹿島槍と集中的に北アルプスに登った。鹿島槍～白馬は‘89年8月にも南→北と逆の方向から行っている。途中で不帰の嶮や五竜の前後などの難所が多く、今となっては俺だってあんなところをやったんだという記憶を残すのみになった。‘70年代には電大WV部OB連中と登ることが多かった。上原・今村・飯塚・千野といった連中としょっちゅう登った。上原は山の技術が優れていて、雪山の技術などはみんな上原から教えてもらったものである。登る時のタイミングの取り方も上原の受け売りである。それに彼は登山靴などの山の道具を大切に扱った。彼に言わせれば当たり前のことじゃないかと言うが、それを当たり前に行えるということが一級品である証明なのである。イチローみたいなプロのスポーツ選手でも、一流選手は道具を大事に扱うという。



写真11 水晶岳で上原・千野と

学生時代から南アルプスの赤石岳へ登るまでを私の登山第一期とするならば、北アルプスを始めに100名山を登りつくした‘74～‘87年ぐらいのときは第2期といえて、技術面でも体力面でも最も充実した時代であった。

‘90年代前半には山の記録というものをつけていなかった。私のサラリーマン生活の中では例外的に仕事上も忙しかった。それでも年間に3～4回は登っていたと思う。会社の岡村を中心にしたメンバーと一緒に、夏は北アルプスが多かった。最近では、20年くらい前に建築現場で同じ仕事をした大金さんおよびその会社の人達と、2年続けて北アルプスへ登っている。多くの山好きの人間の最大公約数として選ばれやすいところなのであろう。

‘00年8月に一人で雲ノ平～三俣蓮華～黒部五郎～太郎平を周遊していた時には、‘97年のキリマンジャロの時に新婚旅行として同じツアーに参加していた島田夫妻とバッタリ出会った。長く山をやっていると山での偶然の出会いということも3～4回はあった。‘97年のキリマンジャロの仲間とはその後も数回山登りや飲み会を行っており、‘01年10月にも涸沢へ同行している。仲間の一人の政岡さんの奥さんが翌年出産予定であり、しばらくは山へは行けなくなるので、そのセンチメンタルジャーニーであった。奥さんの美緒さんにとって思い出になる山であったであろう。北アルプスにはそんな感傷も呼び起こさせてくれる一面を持つ。目に染みるような紅葉の美しさが一層の花を添えてくれていた。

3000m以上の山の多さでは南アルプスには劣るが、岩峰がもたらすファンタジックな現象を簡単に引きずり出してくれるのも北アルプスの魅力である。写真15は、五竜岳付近で撮ったブロッケン現象である。私の長い山経験の中でも4～5回程度しかブロッケン現象に出くわしていない。最初こそ南アの観音岳であったが、後はすべて北アルプスである。地形的にも山容としてもブロッケン現象の出現に適しているのであろう。虹の真ん中に自分の姿を見せつけられれば、誰だってロマンティックな気分をかき立てられる。

北アルプスでの単独行はおっかなそうなところは避けた。やはり意識しなければいけないところが多いのであろう。気軽に一人で行ったところでも今から思うと、もう一回といわれればいやだということが多い。おっかなそうだから嫌だけれど、おっかないからまた行きたくなるのが北アルプスである。



写真12 岡村や片桐と



写真13 ミヤマダイコン草



写真14 政岡夫妻らとセンチメンタルジャーニー



写真15 五竜岳近辺のブロッケン現象

4. よく登る山

よく旅行というものは、旅そのものよりも計画を立てるときが一番楽しいと言う人がいる。しかし私は面倒くさがり屋なので、計画を立てること自体が面倒くさい。だからついつい同じ山へ行ってしまうことが多い。

1) 丹沢

家から一番近い山であるので一番たくさん登っている。高山植物が咲き乱れる山としては低すぎる。紅葉の美しさもたいしたことはない。ただ傾斜がきついという厳しさは一級品である。‘80年以來正月は、海外登山で不在であった2回を除いて、毎年2日か3日に丹沢山へ登っている。大倉から1時間目のところにある休憩所まで何分で行けるかが、その年の体力を測る目安となる。最近では60分を切れないことが多くなった。しかしここを通過する時点でどのくらい余裕を持っていたかがその後のスピードに影響を与える。この山へ登る目的は自分の体力を測ることであるので、カメラもめったに持っていかない。しばらく山へ登らなかつた後で、南アや北アなどの大きな山を目指す前には、塔ヶ岳などを足慣らし目的として登ったこともある。丹沢山塊の最高峰である蛭ヶ岳へは‘03年7月に久しぶりに登った。その頃ちょっとした岩場などで足がすくむことが多かつたので鍛えなおす意味でこの山を選んだのである。しかし塔ヶ岳の手前で足がつってしまった。若い頃はよく足がつるくせがあつたが、年とつたら筋肉もいい加減になつてつらなくなつたのだろうかくらいに考えていたのであるが、そんな説はなかつた。単にテントなどの重たい荷物を背負う登山をしなくなつたのでつらなくなつたということみたいだ。でも一応最後まで

は歩いた。蛭ヶ岳の小屋にはじめて泊まつたが、山とは無関係であるようなリタイアしたおじさんが小屋番をやつていて、そのアンバランスが面白かつた。足がすくむとか足がつつたりすることが多かつたこの頃は、体力面でのバイオリズムが最下点にあつたのかも知れない。学生時代に西丹沢の城ヶ尾峠から菰釣山を經由して山中湖まで抜けたことがある。このときは一面の熊笹の中を掻い潜るようになつて歩いてその難行が楽しかつたが、‘04年1月にツアー会社が組むアイゼン歩行の会というやつに参加してみたらすっかり刈り取られて楽な山に変貌してゐた。西丹沢ではわりと知られてゐる山である畦が丸はまだ登つたことがない。“よく登る山”の一番手にあげたくせに、塔ヶ岳近辺に偏つてゐる。

一番高いのは蛭ヶ岳なのに山塊を表す名称は丹沢山が持ち、登山者が一番多いのは塔ヶ岳で、姿が美しく昔から一番有名なのが大山であつたりして、けっこうややこしい。

‘00年3月に癌の手術を受けた後に最初に登つた山も丹沢山である。きわめて地味な山に一番たくさん登つてゐるということも俺らしい。100回には満たないようであるが、80回以上登つてい



写真 16 丹沢らしく地味な塔ヶ岳山頂



写真 17 鍋割山でキリマンジャロの仲間と

る。そのうちの 50 回以上が塔ヶ岳を絡めたものであろう。

2) 安達太良山

所属した東京電機大WV部は、安達太良山麓の塩沢温泉に部としての山小屋を持っている。私がまだ現役のころに、建てるかどうかの大議論がOB・現役をひっくるめて戦わされた。私は、ワンダーフォーゲルというものは各地を放浪するのが本来の姿であるので、拠点を持つのはおかしいと言って反対した。賛成派のOBの人達から、“お前のような奴は社会に出てからも役に立たない”と太鼓判を押された。結果としては、あの先輩の言われたことは合っていたようだ。そんな経緯もあったが、出来てからはよく使わせてもらった。ことに‘72～‘79年は、毎年正月を安達太良山で迎えた。上原・今村・飯塚・千野のメンバーは、私を最年長にしてひとつずつ学年が違う。なぜか一塊になってよく山へ行ったが、全員がそろるのは安達太良だけであった。上原とは北アルプス中心に、飯塚とは南アルプスや日光連山、今村は高くて派手なところよりも森に囲まれたような山を好んだ。こういったいわば高橋一家といえるメンバーを中心にして 10 人位で、大晦日に登って頂上直下にかまぼこ型テントを張り、2 日に麓の山小屋へ下るわけである。その間酒の飲み続けである。元日は二日酔いで、一度も御来光を拝んだことは無かった。

今村は工科系の大学に入ったのが間違えと思えるようなやつで、政治とか社会運動に興味を持ち、技術系の会社に入ったがその後地方公務員になっている。消防や社会福祉関係の部署を歴任しているみたいで、やはり収まるべきところに収まっているという感じである。彼の、社会を真直ぐにしたいという姿勢に、先輩のはずの私がけっこう影響されていたようなところがあった。今村の様なヤツは関東大震災の後とか太平洋戦争の後のような混乱期に生きたら、もっと特長を発揮したかもしれない。今は多分ボランティア活動などをやって、やっぱり真直ぐ生きているのだろう。今村が、当時WV部同士の付き合いがあった家政大の女の子を連れてきてその後結婚したので、それ以降も女の子を連れてくる人が多かった。俺も連れて行ったことがあるがうまくはいかなかった。この当時の仲間でもたまにメールのやり取りがあったりするのはいま今村だけになってしまった。飯塚に至っては生きていいのかどうかさえ判らない。心臓に持病があったので気になるところである。料理番は常に千野であった。レストランなどで食べたものを美味しいと思ったときは、あとで自分の家で作ってみるというから半端じゃない。インスタントラーメンを作ったって彼の場合は、このメーカーのスープは 3/4 位にしておいた方が良く、一味違う。

‘73年2月のときは危なかった。転職した折に 10 日間ほどの日程を取り、安達太良山へ行った。最初の 2 日程は奥岳温泉スキー場で下手なスキーを楽しみ、3 日目はくろがね小屋へ移動、4 日目に安達太良山頂上を踏んだ後奥岳温泉スキー場へ戻ってから塩沢温泉へ移動し、次の日から再びスキーを楽しむという予定を組んだ。問題は 4 日目の安達太良山登山の日であった。平日であ



写真 18 安達太良のカマテン



写真 19 今村夫妻を中心に

ったので頂上を目指す人は私一人であった。くろがね小屋を出るときから雪混じりの曇り空ではあったがたいしたことはなかった。山頂が近づくにしたがってガスは濃密度を増し、雪山でガスされるとすべて真っ白の世界になり、自分の足元すら霞んでいる。後ろを振り返っても自分の足跡も吹き始めた風のためにたちまちかき消されている。まるで白き牢獄だ。とにかく稜線に出れば勝手に勝手知ったる所であると、きつくなった勾配を無視して稜線へ出た。頂上にはとにかく行ったと思うが定かではない。下りにかかると方向感覚がなくなった。いつも沼の平方面から吹き上げてくる風が右頬に当たる。自分の感覚では左に当たらなければいけないはずである。ようやく道標を見つけてピッケルで雪を払い落とすと、それは道標ではなく木についたエビの尻尾であった。そんなことをしているうちにますます方向感覚はなくなっていった。磁石の針の色を塗ったほうが北だか南だか自信が持たなくなってきた。地図を出すのも風と寒さの中で億劫になる。そんな時でも自分で思ったことは、“俺はこんな状況になっても実に落ち着いている”と自己評価していた。すったもんだの末、見たことのある稜線上の祠を見つけて危機は脱した。やはり自分の思っていた方向はまったく逆であった。ここまで来れば大丈夫といえる勢至平で自分の足元を見ると、いつの間にかアイゼンの歯で引っ掛けたらしくスパッツはビリビリに破けていた。“落ち着いている”なんてとんでもない。もしかしたら自分の山経験の中で一番危なかったときであるかも知れない。

安達太良山へは学生時代の仲間以外とも親しくなった人とは一度は登っている。ほとんどが積雪期である。雪山としては危険度が少なく、頂上近くのくろがね小屋は日本一高いところにある温泉を持つ小屋としても有名であるので登り易い。最近でもスノーシューなどの履き試しの山として、雪のシーズンにはよく登っている。

3) 谷川連峰

東京から比較的近く、日帰りできて高山へ来たという感じが持てるので、手ごろ感が持てるでもいうところか。6月の雪解け後の谷川岳に一番たくさん登っている。早朝の新幹線に乗れば楽に日帰りができる。登りはたいてい巖剛新道を使い、下りは天神尾根を經由してロープウェイである。一人で行くことが多い。

谷川連邦の西の端っこの平標山にも‘70年前後は良く登った。まだ上越新幹線の出来る前で、そのころの谷川方面への山行は夜行日帰りが普通であった。山名通りの平らな頂上である。ここで雷にやられたことがある。いくら私の背が低いといっても、このときは雷が全部私を狙っていると思えるほど激しかった。必死に走り回って森の中に逃げ込んだ。土樽の駅に降りてきたら、蓬峠で落雷を受けた人が担架に乗せられて下りてきた。‘68年には2週続けて平標へ行った。最初の週は雨の後で沢が増水して登れなかったもので、翌週また行って登ってきた。あのころは根性あった。‘71年10月の平標では三国峠近辺の紅葉に対して、キャンバスに分厚く絵の具が塗られた油絵の世界を感じた。考えてみると、案外私は紅葉のシーズンに山に登ることが少ない。日本の山の美しさの特徴を一番感じられる時期でもあるが、夏に大きな山をやってしまったら満腹感が残っているからかもしれないし、それとも19歳の時の北アルプスでの転落がまだ後を引いているのか。その当時は平標の頂上はどこでも歩けたが、今は木道が敷かれてしまってこ



写真 20 谷川連邦の朝日岳で片桐君と

の上しか歩けない。平標の良さが味わえなくなってしまった。木道なんて尾瀬だけであったのが、今は北アルプスを始めそこいら中に木道が出来てしまった。高山植物保護ということであるが非常に味気ないし、本当に効果があるのだろうか。

写真 20 のように '01 年 5 月には片桐君と、谷川岳とはお隣の白髪門や朝日岳へ行った。私にとっては完全な雪山であったが、野沢出身の片桐君に言わせると、5 月の山なんて雪山とは言わないそうである。ヘッピー腰でピッケルに頼って歩く私に対して、彼はアイゼンも途中で外してしまった。彼と山へ行くといつもバカにされる。

4) 尾瀬

自然児である片桐君は竹の子取りが好きだ。八百屋で売っている竹の子ではない。ただの笹藪の中の細っこい新竹である。皮をむいて味噌汁にするとうまい。焼いて酒の肴としてもけっこういける。彼はザックいっぱい取って帰り、頂上なんて登らない時すらある。尾瀬では自然に生えているものはたとえ枯れ草でも取ってはいけませんというカンバンが出ているようなところなので、本当はいけないのであるが最近はやっていないのでまあ聞かなかったことにしてくれ。一番たくさん行っているのは、大清水から長蔵小屋へ入ってテントを張り、翌日は燧ヶ岳へ登るコースである。燧ヶ岳は双耳峰の良い山である。頂上近くにわずかに雪が残っている 6 月くらいの時がいい。「夏の思い出」という尾瀬を歌った歌の中に～水芭蕉の花が咲いている～という一節があるが、水芭蕉は 5 月前後の花であるのでちょっとおかしい。

'78 年 11 月に飯塚と法師温泉から笠ヶ岳経由で至仏へ登った時は雪の降った後で、至仏から見る白銀の尾瀬ヶ原は今でも記憶に残っているが、その後しばらく至仏への登山禁止の時代があった。いつも燧ヶ岳ばかりでは芸がないよと片桐君と '98 年 6 月に久しぶりに至仏へ登って見たが、頂上まで木道になっており歩きづらいうちからもうたかさ

んだ。このときも鳩待峠で、ヒマラヤのゴーキョピークで一緒だった竹内さんにバツリ合った。

何のことはない、よく行く山といいながら尾瀬に行くのはほとんどが 6 月みたいだ。西丸震哉の本を読むと、現在のような観光化される以前の尾瀬はこうだったろうとかいう話がよく出てくる。それはそれで面白く読ませていただいたが、私は現在の形しか知らないのだから、まあこれでもやっぱりきれいだよ。西丸論法とは逆になるが、日本の山は素人しか行かないような山でもけっこう危なっかしいところは多いと感じる。山は自然なのだからあんまりしっかりした道を作るの



写真 21 6月の燧ヶ岳

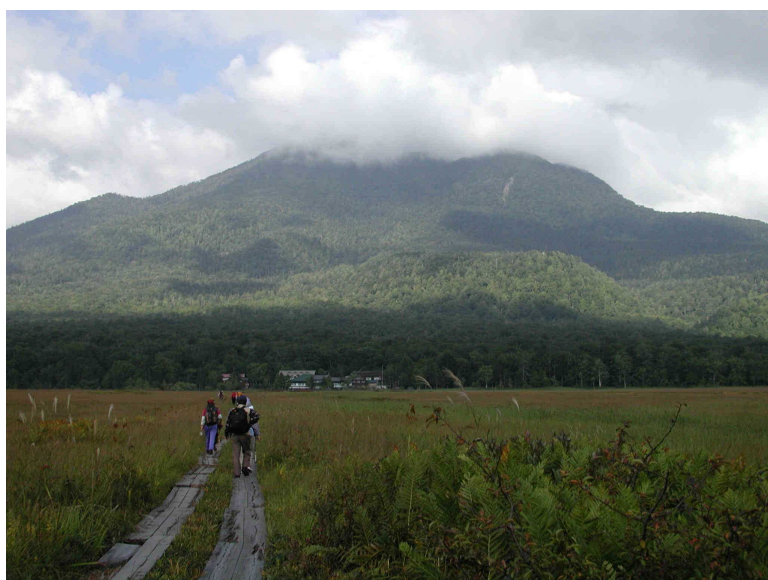


写真 22 尾瀬ヶ原の木道

は良くないという論法だろう。ヒマラヤのトレッキングに行っても思うことの一つに、石を使って整えられた道がすごく整備されている。トレッキングとは生活道を歩くことなので山道と比較してはいけないが、ポピュラーな山はこれだって良いじゃないかと思う。

なぜか尾瀬ヶ原から尾瀬沼を全部歩いたことはない。ほとんどが1泊2日で行ってしまうからであろう。全部やるためには2泊したいところである。至仏の山頂まで続く木道や峠越え部分の木道は冴えないが、尾瀬ヶ原の木道だけはそうすべき必然性があるので、抵抗感はない。むしろここには木道があるほうが自然である。皆が楽しめる自然。尾瀬とはそんなところである。

5) 八ヶ岳

東京からは交通の便が良いので気楽に行けると思っていたが、'03年7月の赤岳では山頂近辺でけっこう緊張を強いられた。天気は良かった。

'70年代によく登っていた時にはなんとも思わなかったところでケツが引けた。年をとったことを理由にしても良いが、何か違う。簡単だと思っていたところで、そうでもないなという感じになることは多い。そんな時には必要以上に厳しさを感じてしまう。このときもそういったことなのだと思う。覚悟して登れば、まあこんなものよ、という感覚になるかもしれない。いずれにしろ八ヶ岳を簡単などころというほどの実力は俺にはないのだ。それだけは認識しておかないと痛い目にあう。



写真 23 '03年の赤岳山頂

'77年4月の赤岳は残雪が多かった。行者小屋から赤岳と阿弥陀の鞍部へ出た所でそいつに会った。そいつは雪の上で、小型コンロでお茶を沸かしていた。“一杯飲みませんか”と言われてお相伴に預かり、それ以降は自然に同行する形になった。雪が多いのがかえって幸いしたのか赤岳までの行動は順調だった。この当時は私の技量も結構高かったのであろう。怖かったという記憶はない。下りにかかって、私はもと来た阿弥陀との鞍部へ引き返す予定でいたのであるが、彼は行者小屋へ真っ直ぐ下る文三郎尾根を行こうと言う。そこは急坂なので逡巡している私を“大丈夫ですよ”と自身たっぷりに誘うので、ついつい付いていってしまった。途中で、沢筋の急な雪の斜面と夏道とが分かれるところで、彼はグリセードで下ると言った。私にはグリセードをこなすだけの技量はないので、行者小屋で落ち合うことにして私だけ夏道を取った。行者小屋に着くと彼の姿は見えない。彼が車で送ってくれるというので、山の上でゆっくりしていたのであるが、すでにバスの時間には間に合わない。どうしようもないので30分以上も待ったであろうか。私が下ってきた夏道の方角から彼がピッケルを振りながらかけてきた。グリセードで下っていたら滝の上へ出てしまい仕方なく戻って、結局私と同じ道をたどって下りてきたということだ。それから一緒に下って彼の車で茅野の駅まで送ってもらい、駅前のそば屋でビールを飲んだ。青梅マラソンに出て、1mでもいいからトップに出ようと思ったが、あまりの人数の多さにそれさえ果たせなかったので、一番早くリタイアしたなどということを屈託なく話していた。山登りをするために長野県の信用金庫に勤めたという。私は一人の山のときは、“こんにちは”の挨拶以外ほとんど話しはしない。雪の山などでは人に会うことも少ないので、気が付いたら駅で切符を買うとき以外は一言も口を利かなかった、などと言うことはしょっちゅうである。だからこんなに楽しい出会いというのは記憶に残ることであった。こういうのを一期一会というのであろうか。

'81年7月の硫黄岳は、片桐君が学生時代に硫黄岳のこまくさ山荘でアルバイトをやっていたことがあるという関係で、彼が山小屋開設30周年に招待されたのに便乗した。宴会で調子に乗って、1升ビンを抱えてヨカチン踊りをやったら、地元の新聞社にバチバチ写真を撮られた。まさか新聞には載らなかつたろうと思うけど。宴会中に甘酒なんか飲ませやがって思っていたら、

翌朝になって“ドブクロク呑むかい”って言われて、見たらば昨晚の甘酒と思ったヤツだった。

2・3月の厳冬期に南や北のアルプスをこなす技量はないので、冬に歯ごたえのある山へ行きたいときは八ヶ岳が選ばれる。厳冬期の山といっても安達太良山を除けば、この八ヶ岳だけが唯一の経験である。‘73年2月に上原と天狗岳へ行ったのが八ツの雪山への登り始めである。

‘86年3月のことだったか。片桐君と二人で天狗を目指し、黒百合平にテントを張った。確か2泊の予定で行ったので、ウィスキーを2本持参したら1晩で飲みつくしてしまった。夜中に大声で歌を歌ったりしたらしく、翌朝に黒百合平小屋のお兄ちゃんに怒られたこと、怒られたこと。

‘90年代のある年に5月の南アの小仙丈～仙丈岳間で足がすくんでしまうようなことがあり、次の年の5月にレベルを落としたつもりで蓼科へ行ったらやはり恐ろしさを感じてしまった。50歳を過ぎたのもう雪山をやる年ではないやと思って、一旦雪山からは離れた。その止めたはずの雪山をまたやり始めたきっかけは、‘97年のキリマンジャロであった。旅の恥はかき捨てだからアフリカくんだりで適当なこと言たって分りゃしないよと“俺は日本じゃ雪山しか興味ないよ。”と偉そうに言ってしまった。日本へ帰ってしばらくしたら、この時のメンバーの政岡さんが（当時彼は26歳くらいか）“雪山へ連れてって下さい”と言ってきた。天狗岳へ連れて行って何とかごまかした。政岡さんとは、その後も雪の硫黄岳や蓼科山などに登っている。最近は雪山では新聞社などの主催するツアーに参加して安全登山を心がけるようにしている。これはこれでけっこう楽しい。‘04年の今年、アイゼンを新調して簡単そうなところだけであるがまだ雪山をやっている。



写真 24 ‘98年の赤岳鉱泉で

次の詩は、私の初めての公表作であり、‘73年位だったと思うが、雑誌「山と溪谷」の投稿欄に掲載されて、原稿料（500円）もいただいたものである。八ヶ岳の黒百合平あたりをイメージして書いたものである。若い女性からファンレターが来て、一度デートをしたらそれ以降手紙は来なくなった。

緑の愛

すべての現実が白銀の世界に占領されている時でも
緑の森はその白き世界の上に茂り続ける
緑よ、おまえはこの世の愛のしるし

雪をかきわけて
ふところ深きおまえのもとへ入り込みて
おまえの愛のまなざしを全身に受け
よろこびに勇みなおもかきわける雪に
高鳴るわが心臓のひびきは
おまえとおまえの仲間へ送るセレナーデ

これほどまでに狂おしい愛なれど
この胸に抱きしめることは決してない

この両の手ににぎりしめるものは何もない
これがおまえの愛のかたち

むなしさを哀しみの小箱に包み
おまえのもとからはい出してきて
車窓の人となりておまえをみつめ
汽車のけむりが私とおまえを断ち切るとき
私とおまえの愛は夢の世界へ退いていく

私の心を支えるものは
緑よ、おまえの愛なれど
私の身体を支えるものは
空虚なりし都会の現実

‘73/11/18

5. 日本百名山

深田久弥の「日本 100 名山」の初版は、おそらく私が山を登り始めた '64 年くらいであろうと思う。学生時代からいくつ登ったなどとみんなで話し合ったりしたものである。しかしこの時代は会社員に夏休みなどという習慣もなく、よほどの大企業でない限りは土曜日も半ドン勤務が当たり前であった。だから 100 名山を全部やるなんていうことは考えもしなかった。その代わりいくつくらいなら登れるかということ考えた。大学卒業時点では 20 であったので、70 くらいはいけるであろうと思った。まず北海道や九州を除き、次に筑波山や天城山などの山男がマジに登るような山でないと思われる山を除いた。残ったのが 70 くらいということである。特に意識したわけではないが偶然にも、山登りを始めてから毎年最低でも一つは 100 名山の数を増やしていた。その中でも上原や今村と北アルプスなどによく行った頃は 100 名山の数もずいぶん増えていった。上原や今村があまり登らなくなってしまうからは、元来が面倒くさがり屋で冒険心なんてないから、気がついたら同じ山ばかり登っていた。丹沢ばかり行っていたようだ。好きだから行っていたわけでもない。山登りなんて、運動神経の鈍い俺の身体を動かすための手段に過ぎない。100 名山を全部やってやろうと思ったのは '85 年のことである。数えてみたら想定していた 70 を越えていたばかりか、その 70 の中には一昔前に無理だと定義していた北海道の大雪山系が含まれていた。同じ山にばかり行っている自分が、100 名山を目指すことでいろんな地域に目を向けられるということに魅かれた。その年の頃にはサラリーマンでも夏休みをとるというものが定着し始めていたのである。そのことに気がついたらとたんに、100 名山全部やってやろうと思った。山登りを始めてから 20 年が過ぎていた。そして残りの 30 をやっつけるのに要したのは、わずか 3 年であった。この 3 年間に重点的に登った北海道・九州・東北の山と富士山を振り返ってみよう。

1) 北海道の山

まず 100 名山全部やろうと思うきっかけになった '84 年の大雪山～トムラウシ～十勝岳までの大縦走から始める。片桐君とテントを持って行った。前述のようにこの時点では特に 100 名山完登を目指していたわけではない。飛行機を使って山登りしたのはこのときが初めてである。まず羽田で引っかけた。“火気類はありませんか”と聞かれて、ラジウスを持っていたので“ハイ”と答えてしまった。その場で石油は没収である。片桐君はうまくごまかして 0.5 リッターの一つだけは確保された。

“旭川で調達すれば良いよ”などと気楽に構えていたら、そんな時に限って交通のつながりはよく大雪山行きのバスに接続よく乗れてしまって、気がついたときにはもう大雪山中に入っていた。二人で 5 日間の山に対して 0.5 リッターの石油ではきつい。私は、食べ物なんて生だって大丈夫だよという人間であるが、片桐君はけっこう潔癖主義者である。いつもコップは私が持ってゆく係りであったが、私の洗いは信用できないと言って必ず洗い直してから使うような奴である。だから食べ物を生のままで食うなんてとんでもない。火を使うことはぎりぎりに切り詰めて山行をした。もともとの計画とはいえ、大雪～トムラウシとトムラウシ～十勝岳は 2 日続けての 11 時間行動である。このときの私は絶好調で、長野県野沢出身の山だし男の片桐君より強かった。ただし最初の 3 日間だけである。トムラウシの大きな岩のごつごつした山頂周りを越え



写真 25 大雪山の三川台あたり

るあたりからメッキが剥げてきた。最後の2日間はやはり自力の差が出て、必死の思いで付いていった。身体が一回り細くなってしまふほどつらかったけど、大雪山は最高に美しかった。トムラウシの南にある三川台のカールに展開されるお花畑は、映画「サウンド・オブ・ミュージック」でジュリー・アンドリュースが花畑の中で歌いながら登場する冒頭のシーンを彷彿させるものがあった。あまりにも気に入ったのでトムラウシから十勝岳は、‘90年代になって同じく100名山を目指していた会社の先輩の安藤さんとも登っている。最初のときは7月下旬であったが、このときは8月のお盆の時期であったので心なしか高山植物が少なかった。北海道の夏は短いので、時期を選ぶのも難しいようだ。

‘85年は後方羊蹄山と利尻山の一人旅である。後方羊蹄山へ登るためにニセコの駅に降りると大雨だった。半ばあきらめて駅のベンチにひっくり返って寝ていたら、雨が小降りになったので急いで登った。雨の後の澄んだ空気の下で、平野の中にすり鉢を伏せたような後方羊蹄山から下を見ると、自分が天井人になったような気になった。下りるとその足で稚内へ行き、次の日は利尻山である。高度差1700mを1日で登って下りるのであるから半端ではない。これをやるために、一月前に奥穂に登って高度差に対する訓練をしておいた。利尻山ではWV部の後輩にバッタリ会った。かなり後輩であるので私は知らない顔であったが、向こうが気付いてくれた。

‘86年は日高幌尻岳と阿寒岳である。額平川の30回近い徒渉があり一人では怖かったので、会社の後輩で10歳年下の出野君を誘った。本当に奥深くにある山であり、100名山という引き合わせがなかったら知ることでもなかったであろう。このときは頂上もガスに包まれて何も見えなかったが、‘90年代に会社の人と5人位で再び登ったときには良く晴れ渡り、残雪の残る緑の稜線を満喫できた。牧歌的なその山容はまさに私の好むところである。ただ、‘86年のときは振内まで鉄道が通っていたが、‘90年代には廃線になっており振内の町は寂れてしまっていた。日本という狭い国土をなんでより狭く使うのであろうか。阿寒岳には雄阿寒と雌阿寒があり両方登った。まず雌阿寒を気楽に登ったところまでは良かったのであるが、翌日の雄阿寒に登る日は朝から雷を交えた大雨であった。それでも登ろうとする私に、同行の出野君が言った。“100名山は宗教だ！”当然彼は同行するわけもなく、誰もいない雄阿寒で、もし熊が出てきたらどうしようかと思って怖かった。‘87年は羅臼岳と斜里岳である。このときも一人であった。国後島というのはこんなにも近いのかと思いつつ羅臼岳に登った。途中、道を間違えて1時間近くも戻ったりしたが実に冷静に対処することが出来て、自分の山の實力を心の中で自画自賛しながらウトロ側へ下った。ウトロへ向かうタクシーの中で、運転手から“お客さん、熊はいなかったかい”と声をかけられた。このとき私は熊のことを



写真 26 利尻山でWV後輩と



写真 27 日高幌尻岳額平川の徒渉



写真 28 カムイワッカ

ぜんぜん心配していなかった。“え、ここは熊がでるの”と聞き返したら、運転手はあきれていた。そういえば前年の夏に、熊が民家に上がって冷蔵庫の中身を食べてしまったというニュースが、ここでの出来事であったことを思い出した。前年の雄阿寒ではあんなに熊を恐ろしがったのに。恐怖感なんてそんなもんだ。ウトロでは宿で同室になったおにいちゃんが、車でカムイワッカの滝や網走監獄博物館を案内してくれた。カムイワッカの滝は温泉が川になって流れており、40分ぐらいかけてその温泉川を登って最後のトロになったところで温泉につかった。山の温泉はずいぶん見てきたが、温泉川なんて他では見たことがない。斜里岳は私にとっては100名山中の99個目であり、このときは傑作であった。雨交じりの天気であったが、途中の峠を越えると雲の上へ出てすっかり晴れ上がっている。登山者は私一人であり、見渡せる限りのあたり一面誰もいない。頂上に立つと、そこからは今歩いてきた峠までの30分以上の行程を見渡すことができる。“チャンス！”私はスッポンポンになった。私の身体の中で、今までお天道様を見たことがない部分にも十分に拝ませてやった。1時間位日光浴を楽しんだが、この日は一人も登山客には会わなかった。



写真 29 斜里岳

2) 九州の山

屋久島にある宮之浦岳には学生時代に登っていたが、後は‘86年にまとめて登った。3月に霧島山と開門岳の鹿児島シリーズをやり、5月に阿蘇山・九重山・祖母山の熊本・大分シリーズをやった。霧島山は、えびの高原から韓国岳を通して高千穂峰まで南下した。広々とした高原は気持ちよく、たぶん山小屋関係の人であろうと思われる老人が、遙か遠くから北上してきたと思ったら瞬く間にすれ違い、数時間後には戻ってきて再び瞬く間に南へ去って行った。水上勉の小説に「風の王国」という日本の山岳部族を描いた本があったが、あの老人はその一族ではないかとふと思った。この山での前後に泊まった温泉が印象的であった。えびの高原では、嫌がられるはずの一人客なのに広い部屋をあてがってくれた。下りたところの林田温泉では広いガーデンバルコニーのような食事場でショーを見ながらの夕食であった。ビールを注いでくれた女性の感じが良かったので、一層印象が良くなった。行き当たりバッタリで行ったのについていた。開門岳は半島に突き出るように富士山状の優美な姿を海風に洗わしているユニークな山である。海岸から二周位回りながら頂上までの道がつけられている。その日のうちに鹿児島まで戻りたかったので林の中を直登してしまったが、これでは開門岳の良さを味わえなかったのかもしれない。頂上を極めれば良ってもんじゃない。



写真 30 阿蘇山

5月の熊本・大分シリーズはもっとひどかった。まず阿蘇へ登ったが、連休中であるので道が混んでバスは渋滞の渦に巻き込まれてしまった。その日のうちに九重山の麓まで行きたかったのに、途中でバスを降りて強引に頂上を極めた。九重連邦ではミヤマキリシマの群落を見るには一

月ほど早く、ただひたすら登りはじめた。名主である久住山の東に同じ高さの大船山がある。本当はこっちの方がちょっと高いんだなどという話がよくあるので、両方とも登った。しかしここで失敗をした。「坊がつる賛歌」の発祥の地でもあるのでお花畑の雰囲気味わいたく、久住山から一旦沢沿いに降りて坊がつる経由で大船山に登り返した。後でよく調べたら、その間にある中岳が九重連峰の中では一番高いことが判った。100名山としては久住山で良いのであろうがちょっと引かかる。さらに祖母山まで足を延ばした。渥木の登山道は新緑の5月のイメージはなく、冬枯れの山を登ったという印象であった。コースは忘れてしまったが、帰りのことを考えて熊本方面へ行く道を選んだのであるが、時刻表で調べておいたバスがない。その時間帯には二日に一度の割でしか走っていなかった。過疎の村では致し方ないのであろうか。北海道の幌尻岳で感じたことと同じことを感じさせられた。明治維新以来、日本人は開拓に開拓を重ねて国土を広めていったのに、今は効率だけを求めて都市にだけみんなが集まってしまう。まあ、俺のような東京以外に住んだことのない人間が言うことではないが。

100名山のラストスパートであり、今考えるとこんな形で登ったからといって何になるんだとも思う。100名山とは、自分ひとりでは思いつかなかった山を知ることができるという前向きな側面と、行き過ぎるとただこなすだけという後向きの側面を持ち合わせている。

3) 東北の山

100名山の残り30を切ってから登った東北の山は‘85年の八甲田山・岩木山と‘86年の月山・鳥海山・吾妻山であり、鳥海山に登った後で当時は秋田に住んでいた厚木勤務時代の後輩である若林君の家へ厄介になった。彼が厚木から仙台に転勤になったときの‘83年にも、早池峰山・岩手山・八幡平をやったときに仙台の家泊めてもらっており、早池峰山は家族全員に付き合ってもらった。そのとき小学生であった二人の子供はすでに結婚して、彼ら夫妻は今ではお祖父ちゃんとお祖母ちゃんである。早池峰山の時は一面のガスで、この山の特徴である高山植物を愛でる余裕なんてなかった。下山後は若林一家に小岩井農場まで送ってもらって、そこから先は一人で岩手山から八幡平まで歩いた。岩手山から八幡平までをテントを背負って縦走したのであるから元気があった。この時で39歳か。まだ体力の衰えなんてないよと普段は思っているが、このように実例を持って具体的に考え



写真 31 九重山



写真 32 祖母山



写真 33 早池峰山で若林一家と

てみると明らかに、今の自分にあのときの再現は無理であり、すなわち衰えたのである。そりゃそうだろう。

新田次郎の小説『八甲田山死の彷徨』を基に作られた映画「八甲田山」は、確か紅葉に包まれた八甲田山の遠景から始まったと思ったが、私が登った‘85年9月はまだ紅葉には早いし高山植物の時期はすでに過ぎていた。酸ヶ湯から登って谷地温泉に下りたように思うがよく覚えていない。ただ広々とした草原だけが印象に残っている。東北にはなだらかな山容の山が多いので、けっこう高いところまで自動車道がついてしまっているのをよく見かける。山についての自動車道は、都会をそこまで持ってきてしまったような気がしてしまう。稜線を自動車道が横切っているのを見たときも、そこで稜線が分断されたように思える。八甲田山にはそのような興ざめのするようなどころはなかった。八甲田山を下りるとその足で岩木山へ向かった。ちょうど地元の人みんな岩木山に登る日という“おやま参詣”という祭りの日にぶつかってしまって山は大賑わいであった。地元のジイ様やバア様が長靴で登っている。こっちは本格的な登山靴であり、抜かれるとみっともないからヒイコラ言いながら歩いた。



写真 34 八甲田山

‘86年9月の月山は、鶴岡からバスで行けるところまで行ってピストンして次の目的地である鳥海山の降車駅である象潟へ急いだ。月山もいづれ山形県側からじっくりと登り直さなければいけない。鳥海山はガスガスの中を行ってきたので何にも見えなかった。道端の木苺が美味しかったこと位しか記憶にない。我々の若かった頃は木苺だろうとアケビだろうと、食えるものが道端から見えるところに残っていることなんて考えられなかった。最近のガキどもは、コンビニで売っているものだけが食べ物だと思っているみたいだ。



写真 35 月山

翌月の10月には吾妻山へ登った。ラジオで野球の日本シリーズを聞きながら歩いたが、この山としてはずいぶん早い時期の大雪になった。すれ違う人もあまりなく、ループワンダリングをしてしまったりしたが、けっこう冷静に切り抜けた。北海道の羅臼岳のときもそうであったが、一人の山行で調子の良いときというものは、案外冴えていることが多い。例え頼りにならないやつでも誰かいると、緊張感に欠けてしまうことがある。



写真 36 吾妻山

4) 富士山

100名山の100個目は富士山であった。この山も100名山がなかったら、見る山であり登る山とは思わなかったろう。子供のころに親に連れて行かれたなどという経験のある奴には、100個目にするなんていうことはできないだろう。100個目としては最適な山である。100名山を記念して、途中の小屋に泊まって下りたら温泉にでも行こうと思っていた。ただいつものこととはい

えあまりにも無計画であった。8月の下旬というのはすでに富士山の登山時期を過ぎていくということさえ知らなかった。当時住んでいた代々木上原の家を早朝に立ち11時ころから登りだした。ところが8月下旬では途中の小屋なんてすでに店仕舞してしまっている。頂上のお鉢を一周して下りてきた。7時くらいであったか、すでに最終バスはなくなっている。たむろしていた観光客相手の馬子に下りる方法はないかと聞いたら、“1万円で車に乗せてやる”と言う。人の弱みに付け込みやがってと思いながら考えていると、今度は“2万円”と値を吊り上げてきた。まるで雲



写真 37 100 個目の富士山

助である。それをそばで聞いていたアベックのお兄ちゃんが、腹を立てて義侠心を發揮してくれて、“送りますから、車に乗ってください”と言ってきた。ありがたく山中湖の駅まで送ってもらった。ここで駅にいたタクシーの運転手に“どこか温泉に泊まりたいのですが、観光協会はありませんか”と聞いたら、“俺が観光協会だ”と言って駅のそばの民宿に連れて行かれた。民宿といってもただのそば屋で、その2階を民宿としているらしい。風呂に入りたいと言ったら、“こんな時間に来て風呂なんて言われても困るから、まずここで夕食をしてくれ”と言う。ビールを飲みながらそばを食っているうちになんだか馬鹿らしくなってきた。“何でこの俺がこんなところでそばなんか食っていなければならないんだ。”頭に来たから泊まるのは止めて、山中湖駅から電車に乗って帰ってしまった。だから富士山は東京から日帰りである。

5) 100 名山総括

‘85年以前に20年かけて70個をこつこつと登っていた時代に比べて、30個を實質2年半でやっつけてしまった後の方はまったくただけでない。ただ頂上を踏んだというだけである。四国の剣山も最初のときは、ケーブルカーとリフトを最大限利用してそんな感じで登った。しかし数年後に広島支店の津守が誘ってくれたので、真面目に下から登り直した。九州の山や東北の山には同じようにしたほうが良いところがたくさんある。九重山なんかは、中岳のこともあるので特にそうである。全体に私の山登りはただ登っているだけでちっとも中身を味わっていない。パプアニューギニアのツアーで一緒になった中谷寶悦郎さんという方が「山の記憶」(自由書房)という本を出版されて、私にも1冊贈呈して下さった。この本を読むと、同じ登るといってもこうも違うのかと思わされる。その山の歴史・地形・背景にある物語・一緒に行った人達への心遣いなど、すべてにおいて深みというものがある。人間としての出来の違いを思い知らされる。しかし俺は俺で生きて行かなければならないのであるから、せいぜい自分がこんな登り方では恥ずかしいと思ったところだけでもこれからやり直そう。

200名山や300名山というものを唱える人もいるみたいだ。100名山でさえ、それをターゲットとして達成される間際になったらいよいよ加減な登り方になってしまったので、そんなものは考えないことにしている。‘02年8月に南駒ヶ岳山頂付近で新潟のオバチャンとすれ違った。下りたら駅でまた会った。300名山をやっているという。“そんなのやる奴は子供のころ頭が良くて、いつも先生から与えられるものだけが勉強だと思っている奴だよ”といつもの説をまくし立ててしまった。オバチャンは“これがあるおかげで、日本のいろんなところへ行けるんですよ”と、俺が100名山を始めたきっかけと同じことを言っていた。真摯な態度で話すこのオバチャンの前では、ターゲットを定めてやっている人はみんな自分と同じように中身なんか味わっちゃいないよ、と決め付けていた自分が恥ずかしかった。

6. 青春と還暦の落差

北や南のアルプスの項に入らなかったが、私の山登り生活の中で花といえる時代に登った記憶に残る山として中央アルプスがある。‘73年5月のことだった。木曾福島から入って木曾駒ヶ岳～宝剣岳～空木岳へ、上原・今村・千野・菊池らと登った。たっぷりと雪もあったので、一人前の山男になったような気がしたものである。この頃、私も上原も今村も飯塚もみんな仕事上での転職を経験した。それぞれ理由は違だろうけれども、社会にぶら下がることだけが人生じゃあないよ、といった気持ちがみんなにあったような気がする。俺たちは山という自然に立ち向かっているんだから、社会に対しても自分の言うべきことははっきり言って、人生を送るべきである。そんな生意気なことをいつも言っていた。今、彼らとの付き合いはほとんどなくなってしまったが、彼らと一緒に山へ行っていた時代が私の青春の一コマといえる。

‘02年5月にパプアニューギニアのウィルヘルム山へ登った折に、下りに際してすっかりビビッてしまった自分に腹を立てて、その年の8月にかけて自分が最高に輝いていた頃の山といえるあの中央アルプスに再び登った。

‘73年のときと同様に木曾福島から入り、宝剣岳まではキリマンジャロのときに一緒であった島田夫妻に付き合ってもらった。その後は一人で空木岳・南駒ヶ岳を越えて越百山まで行った。空木から越百までは‘00年7月の鳳凰のときと同様に、登りで追い越した小母さん達が“良い歩き方だから後ろを歩かせてください”と言ってぴったり付いてきた。しかしいい気になれたのはここまでで、

越百から遠見尾根の下りでは立場は逆転してしまった。パプアニューギニアのテツは踏むまいと、なるべく上体を前傾させてケツを引かないように歩いたのであるが、登りでは生徒であったはずの小母さん達に下りでは追いつけない。無理に体勢を保って歩こうとしたら、頭から突っ込んで派手な顔面制動が2回、シリモチに至っては数知れずであり、ついに小母さん達に引き離されてしまった。さらにその年の11月に片桐君と一緒に越後三山の兎岳にテントを使って行った。テントを背負ったのは片桐君であり、私は彼よりずいぶん軽い荷物であったはずなのに、わずか3時間の下りがもたなかった。急坂で両膝を激しく痛めてしまって、前を向いて歩けずに後ろ向きで下った。このとき以来テントを使った縦走はやっていない。‘97年7月に今村と妙高・火打をやったときに、彼はストックを使っていた。下りで楽になるということであった。“杖をつけてまで山登りなんかやるな”という考え方であったが、1年くらい前からは私もついにストックのお世話になっている。ストックが体の一部になっているようにきれいな歩き方をしている人がいるが、私の場合は左手と左足が同時に出てしまったりしてそこまでは行かない。でも少しは楽なようである。

青春とは、年齢によって定義されるものではなく心の持ち方である、という信念は現実の前に崩れ去った。あとは、青春だけが人生のすべてではない。今日やるべきことはふんだんにあり、それを一つひとつやることだって決してやさしいことではない。そんなことを信条に生きていくか。老いを意識しすぎて老化を進めることだけはやってはならぬ。WV部の時だってドンケツから始まったんだ。ダメなのは衰えのせいじゃない。もともとダメだったんだ。これからもダメだって、それが本来の俺だ。それでも山登りしかやることがないんだからしょうがないじゃないか。



写真 38 中央アルプス ‘73年と ‘02年